

琉球国の「三山統一」

生 田 滋

十四世紀の末から十五世紀の前半にかけて琉球国に山北、中山、山南の三王（以下「三山」と略称する）が分立し、これが尚巴志によつて統一された——ということは琉球の歴史の概説書にはかならず述べられており、疑問の余地のない事実として受入れられている。しかし私は最近機会を得て自分で関係史料を点検してみたところ、「三山統一」に関する従来の説に強い疑問を抱くようになった。そこで私の意見を述べて、大方の批判を仰ぎたい。

一 同時代史料に見える三山関係記事

三山分立時代の琉球に関する同時代史料は『明実録⁽¹⁾』、『李朝実録』、『歴代宝案』である。まずこれらの史料に見える三山関係の記事について検討したい。

三山の分立に関する明側の認識を示す記事は『明実録』洪武十六年（一三八三）正月丁未の条にある。これはそ

の前年に琉球を訪れた明の使者路謙の報告に基くものと考えられる（同書、洪武十五年二月乙丑の条）。

詔して琉球国中山王察度に鍍金銀印、並びに織金文綺・帛・紗羅凡そ七十二匹を賜う。山南王承察度もまたかくのごとし。（中略）時に琉球国、三王雄長を争い、相攻撃す。使者（路謙）帰りて其の故を言う。是に於て亞蘭匏等を遣して還国せしめ、並びに使を遣して中山王察度に勅して曰く、「王は滄溟の中に居り、山を崇び、海を環らして国と爲す。事大の礼を行わずとも、また何をか患わんや。王能く天を体し民を育て、事大の礼を行なう。朕即位してより十有六年、歳ごとに人を遣して朝貢す。朕王の至誠を嘉し、尚佩監奉御路謙に命じて王の誠礼に報ぜしむ。何ぞ王の復た使を遣して来謝するを期せんや。今内使監丞梁民、同前奉御路謙をして符を齎しめ、王に鍍金銀印一を賜う。近ごろ使者（路謙）帰りて言うに、「琉球の三王互に争い、農を廢し民を傷つく」と。朕甚だ憫む。（中略）王其れ戦を罷め民を息め、爾の徳を修むることに務むれば、則ち国用永安ならん」と。山南王承察度・山北王帕尼芝に諭して曰く、「（前略）邇者、琉球国王察度、事大の誠を堅め、使を遣して来報せしむ。而して山南王承察度もまた人を遣し、使者に随いて入覲せしむ。其の至誠に鑒みるに、深く嘉納を用つてす。近ごろ使者海中より帰りて言うに、「琉球の三王互に争い、農業を廢棄し、人命を傷残す」と。朕之を聞きて憐憫に勝えず。今使を遣して二王に諭して之を知らしむ。二王よく朕の意を体し、兵を息め、民を養い、以て国祚を（連）綿たらしむれば、則ち天必ず之を祐けん。然らざれば悔ゆるとも及ぶことなからん」と。

この記事から当時琉球には中山、山北、山南の三王が分立していたこと、明はその分立を認め、それぞれを独

立した政權として認めていたことがわかる。この三山が明と交渉を持つようになった経過を考えてみると、まず中山王の朝貢は明の招諭をうけた洪武五年（一三七二）から同十五年（一三八二）までは原則として二年一貢であったが、それ以後は一年一貢、もしくは一年二貢になっている。⁽²⁾つまり洪武十五年を境として中山王の朝貢回数は二倍、もしくは二倍以上になっているわけである。山南王の朝貢のはじまったのは洪武十三年（一三八〇）、山北王のそれは同十六年（一三八三）であるから、両王の朝貢がはじまったのは中山王の朝貢回数が増加した時期とほぼ同じであり、それは琉球と明との交渉が一段と頻繁になるという現象の一部であったと考えることができる。琉球から明への入貢に使用された船は明に於て建造され、琉球に下賜されたものであった。またその乗組員も多くは明から琉球に移住した人々であつて、かれらのある者は使節や通訳として明を訪れていた。このことについては小葉田淳氏の詳しい研究があるので、ここではふれない。⁽³⁾従つて中山王の入貢が倍加した洪武十五年（一三八二）の前後二、三年の間に、こうした貿易船が明から琉球に下賜されるという名目で多数来航し、それに伴つて相当数の中国人が移住して来たと考えなくてはならない。かれらは日本や東南アジア諸国との間の国際貿易に従事していたが、當時明は鎖国政策をとり、外国からの貿易船の来航は朝貢船に限られていた。従つてかれらは中山、山北、山南王の使節という名目を持たなければ明にむかうことはできなかったのである。中山のほかに山北、山南の存在が明に知られるようになったのは、中山王の使節という名目だけでは琉球から明にむかう朝貢船を必要回数、隻数だけ派遣できず、山北王、山南王の名前をも利用しなければならなかったからであると考えられる。つまり明側のほうで「三山」の分立を必要としていたというわけである。

次に三山のそれぞれの歴史をたどってみよう。便宜上もつとも史料の少ない山北王からはじめることにしたい。山北王の入貢は洪武十六年（一三八三）にはじまり、永樂十三年（一四一五）に終っている（『太祖実録』洪武十六年九月己未、および『太宗実録』永樂十三年四月丙戌の条）。王名としては帕尼芝、珉、攀安知があるが、相互の関係、中山、山南王との関係についての手がかりはない。注目すべき点としては洪武十七年（一三八四）に三山の使者がそろって入貢した際に、中山王、山南王には海舟各一隻が下賜されているのに、山北王には下賜されていないことがあるくらいである（『太祖実録』洪武十八年正月丁卯の条）。

次に山南王について考えてみよう。『明実録』に現れる最初の山南王は承察度である。彼の名前による最初の朝貢は洪武十三年（一三八〇）で、最後は同二十九年（一三九六）である（『太祖実録』洪武十三年十月丁丑、および同二十九年四月丁未の条）。彼に関しては『李朝実録』太祖三年（洪武二十七年・一三九四）十月丙午の条に「琉球国中山王察度使を遣して箋を奉じ、礼物を献じ、擲えられし男女十二名を發還し、在逃の山南王子承察度を發回せんことを請う」とある。この「山南王子」承察度がいつ朝鮮に亡命したのかははっきりしないが、重要な点はこの「山南王子」という記述である。これは「山南王の王子」の意味にもとれるが、私は『琉球国中山世鑑』に「今帰仁王子」、「越来王子」などの表現があり、それが「今帰仁（越来）」に封ぜられた王子の意味であることから考えて、これを中山王の「山南に封ぜられた王子」の意味に解釈したい。つまり私は「山南」はもともと中山王の支配下にあり、そこに「山南王子」が封ぜられていたが、たまたま明側の都合でこれが「山南王」として朝貢に利用されたのではないかと考えているのである。そして「山南王子」が朝鮮に亡命し、中山王がその送還をもと

めていたということは、かれが中国との關係をバックとして中山王から独立し、名実ともに山南王となろうとして失敗したことを意味するものと考えたい。洪武十五年（一三八二）当時の「三王雄長を争」うというのも、中山、山南に関する限りこうした状況だったのではなからうか。

中山王察度と山南王承察都の間の關係を知るためのもう一つの手がかりは『明実録』にたびたび使者として登場する三五郎璽という人物である。彼はまず洪武二十五年（一三九二）に山南王承察度の姪として姿を現し、官生として明に派遣されている（『太祖実録』洪武二十五年十二月庚申の条）。彼は同二十九年（一三九六）に帰国し（同書、洪武二十九年二月戊申の条）、永樂元年（一四〇三）には中山王察度の従子として明に派遣されている（『太宗実録』永樂元年二月己巳の条）。ついで同二年には中山王世子武寧の姪として明に派遣されている（同書、永樂二年二月壬辰の条）。つまり彼は承察度の姪、察度の従子、そして武寧の姪であつたということになる。姪も従子も同じく兄弟の子を意味するので、察度、武寧、承察度は兄弟であつて、他にもう一人、三五郎璽の父親がいたという結論になる。

このように察度、承察度、武寧はいわば一つの王家に属しているものと考えられるが、このことは明に派遣された使者の名前から推定できる。すなわち山南王の使節として明に派遣された人物が、のちに中山王の使節となつてゐる例が多いのである。洪武二十四年（一三九二）に山南王の使節であつた寿礼給智と同二十六年（一三九三）に中山王の使節であつた寿礼結致はおそらく同一人物であらう（『太祖実録』洪武二十四年九月乙酉朔、および同二十六年四月辛卯の条）。三五郎璽についてはすでに述べたが、洪武二十五年（一三九二）に彼とともに山南王から

派遣された官生実他盧尾は宣德元年（一四二六）に中山王から派遣された実達魯と同一人物かもしれない（『太祖実録』洪武二十五年十二月庚申、および『宣宗実録』宣德元年四月己巳の条）。原則として一度山南王の使者として明に派遣されたものは、次に中山王の使者に任命されていたように思われる。

さて洪武二十六年（一三九三）の中山王察度の要請によって承察度が帰国したかどうかについては、『李朝実録』はなにも述べていない。洪武二十七年（一三九四）の彼の名前による朝貢には彼はたぶん直接関与してはいなかったと思われるが（『太祖実録』洪武二十七年正月乙丑の条）、同二十九年（一三九六）の朝貢の際には彼は帰国していたかもしれない（同書、洪武二十九年四月丁未の条）。というのはこれに続いて『李朝実録』の太祖七年（洪武三十一年・一三九八）二月癸巳の条に「琉球国山南王温沙道其の属十五人を率いて来る。沙道は其の国の中山王より逐われ、晋陽に來寓し、国家歳ごとに衣食を給す。是に至りて、上、国を失いて流離せるを以て衣服米菽を賜い、之を存恤せしむ」とあるからである。この記事によると山南王温沙道は洪武三十年もしくはそれ以前に朝鮮に亡命していたことになるわけで、「山南王子」承察度が一旦帰国し、ふたたび亡命した可能性もある。しかし重要な点は山南王が中山王によって追放されたという事実であって、山南王は中山王察度の支配に対して反抗してはいるが、依然として中山王察度が支配権を行使していたことが明らかにになる。

このち永樂元年（一四〇三）には山南王弟汪応祖が朝貢し（『太宗実録』永樂元年三月辛卯の条）、同二年（一四〇四）四月には明から山南王に封ぜられている。すなわち『明実録』永樂二年四月壬午の条には「詔して汪応祖を封じて琉球国山南王と為す。応祖は故琉球山南王承察度の従弟なり。承察度子無くして終りに臨み、応祖に命じて

国事を攝らしむ。能く其の国人を撫し、歳ごとに職貢を修む」とある。汪応祖は承察度の弟、もしくは従弟とされているから、これも中山王察度の子孫である。前に述べた温沙道が承察度をさすすると、「察度子無くして」という記事は中山王とその一族亡命の事実を暗示しているようにも思われる。また永樂元年（一四〇三）に王弟汪応祖の使節として明に派遣された長史王茂は明らかに中山王の臣下であり、同二年（一四〇四）に山南王の使節となって明を訪れた隗谷結制はそれ以前に洪武二十四年（一三九一）、同二十九年（一三九六）には中山王の使節として明に入貢している（『太祖実録』洪武二十四年二月己卯、同二十九年四月丁未の条）。実は中山王の使者であつたものが山南王の使者になつたというのはこれが唯一の例であつて、対外的には汪応祖の山南王即位、つまり内部的に言えば汪応祖の山南王子任命は中山王察度の強い意志によつて行なわれたものと考えることができる。

山南王として次に『明実録』に現れるのは他魯每である。彼は永樂十三年（一四一五）に世子他魯每として明に朝貢し、翌十四年（一四一六）には山南王他魯每として朝貢している（『太宗実録』永樂十四年六月辛酉朔の条）。『明実録』永樂十三年三月丁巳の条には「琉球国故山南王汪応祖世子他魯每、使郎是佳結制等を遣して方物を貢ず。是れより先、応祖は兄達勃期の弑する所となり、各寨官兵を合して達勃期を誅し、他魯每を推して国事を攝らしむ」とあつて、他魯每が王位についた事情が明らかとなる。ただ他魯每と汪応祖との関係、および中山王との関係についてはまったく触れていない。山南王の朝貢がこの他魯每が王位についたところから、中山王の朝貢船、使節によつて行なわれていたことは和田久徳氏が明らかにしておられる。⁽⁴⁾あるいは他魯每が中山王思紹、もしくは世子尚巴志と深い関係にあり、それが明側の疑惑を招かないように、わざと他魯每の出自が秘匿されているのか

もしれない。⁽⁵⁾

他魯每は宣德四年（一四二九）を最後として『明実録』から姿を消してしまふ（『宣宗実録』宣德四年十月癸巳の条）。その理由については『明実録』には説明はない。

最後に中山王について必要な事柄を簡単にふれておこう。中山王の明への朝貢は山北、山南両王のそれに比べてはるかに多く、琉明関係の基本が明と中山との関係であつたことは動かせない事実である。

史料に現れる最初の中山王は察度である。彼の名前による入貢は永樂元年（一四〇三）二月のそれが最後であり、翌二年（一四〇四）には中山王世子武寧の使節が彼の計を伝えているから（『太宗実録』永樂元年二月己巳、同二年二月壬辰の条）、彼の死は同年の夏以前のことであらう。

察度とその世子武寧との関係が兄弟であつたらしいことはすでに述べた。武寧の名前による最後の入貢は永樂四年（一四〇六）三月のことで、翌五年（一四〇七）四月にはその世子思紹がその計を報じているから（『太宗実録』永樂四年三月壬辰、および同五年四月乙未の条）、武寧の死は永樂四年の夏以前のことであらう。

この時期の中山王国の事情に関して『李朝実録』太宗九年（永樂七年・一四〇九）九月庚寅の条には「琉球国中山王思紹使を遣して来聘す。咨に曰く、「一、酬謝の事。照得す、洪武年間累ねて貴国遣使の国に到り、及び珍賧の恵を蒙り、盟耗を通じ、ともに休戚を同じくす。不幸にして後先祖王察度及び先父武寧相繼いで薨逝し、以て各寨の不和を致し、連年征戦息まず。一向疎広にして未だ謝を延すを得ず。深く惶愧を負う」とあつて、察度の死後国内に混乱の続いていたことが知られる。ただこの時期山南王、中山王の朝貢の状況にはさしたる変化は認

められないので、その混乱の程度がそれほどのものでなく、単に地方の寨官、つまり按司が離反した程度であつたと思われる。

これについて太宗十年（永樂八年・一四一〇）には思紹の使節がふたたび朝鮮を訪れている（『李朝実録』太宗十年十月癸丑の条）。ついで世宗即位年（永樂十六年・一四一八）には「琉球国王二男賀通連人を遣して書を致す」（同書、世宗即位年八月辛卯の条）とあつて、琉球国王二男の賀通連という者が朝鮮に使節を派遣したことがわかる。『海東諸国記』琉球国の条には「永樂十六年戊戌又使を遣して琉球国中山王二男賀通連萬鎮と称す。其の書略に曰く、「子の兄今年淹逝し、予始めて通聘す」とあつて、その内容の一部がわかる。「子の兄」とは中山王の長男のことに間違いないが、これが思紹をさすのか、あるいは「二男」は「弟」の誤りで、中山王の兄でやはり思紹をさすのかはつきりしない。いずれにしても思紹は永樂十六年（一四一八）に歿し、その弟の「賀通連萬鎮」（＝勝連按司）が彼に代つて朝鮮に使節を派遣したものと考えられる。

『明実録』によると思紹の計が伝えられたのは永樂二十二年（一四二四）二月のことであるが、これはその前年に明に到着した中山王世子尚巴志の使節阿不察都の報告によるものであろう（『太宗実録』永樂二十一年八月戊午、十一月丙午、および同二十二年二月戊午の条）。もし思紹の死が永樂十六年であつたとすると、尚巴志が冊封の要請をするまでに五年を要したことになる。『李朝実録』に見える「賀通連萬鎮」と尚巴志が同一人物である可能性はない。それは洪熙元年（一四二五）に内官柴山が琉球に派遣された際の勅語に「爾の父琉球（国）中山王は聡明……。爾は其の嫡子、宜しく承統せしむべし」（『仁宗実録』洪熙元年二月辛丑朔の条）とあつて、尚巴志は思紹の嫡子であ

ると明記されているからである。したがって賀通連寓鎮と尚巴志との間には王位をめぐる闘争があったと思われる。この間山南王も明に使節を派遣しておらず、中山王も永樂十七年（一四一九）から同二十年（一四二二）まで朝貢していない。このことは山南王、中山王をふくむ中山王家の中に大混乱が生じ、そのために朝貢もままならなかったことを暗示しているように思われる。これが「賀通連寓鎮」と尚巴志との王位をめぐる闘争で、尚巴志はそれに勝利を収めたのではなからうか。このように考えると、永樂二十一年（一四二三）の世子尚巴志による朝貢が重要な意味を持っていたのではないかと考えられる。⁽⁷⁾永樂二十一年以降の尚巴志の活動に関する『明実録』、『歷代宝案』の記事には三山関係にとって重要なものがないので、ここでは触れない。

以上『明実録』、『李朝実録』の記事を分析した結果、山北王についてはまったく手がかりはないものの、中山王と山南王は同一の王家に属し、山南王は国内的には中山王の「山南王子」というべき地位にあったが、明との関係をバックとして時に独立をはかっていたらしいことが明らかになった。では『明実録』から山北王、山南王が姿を消すことが、なんらかの意味での中山王の支配権の確立を意味するであろうか。

山北王、山南王が『明実録』から姿を消すのは、直接にはそれぞれの名前による朝貢が行われなくなったということの意味する。それが右に述べたような意味での「三山統一」に結びつくかという点、『明実録』には中山王が明に対して「琉球国内を統一したので、琉球国中山王を改めて琉球国王に封じてほしい」と要請したような記事、あるいは明が「琉球国中山王が琉球国全土を統一したので、琉球国中山王を改めて琉球国王に封ずる」という勅諭を発したという記事がない以上、簡単にそうはいえない。山北王、山南王ともに明の冊封をうけ、しか

も明からの使節もたびたび琉球を訪問しているのであるから、もし「三山統一」のような事実が実際にあったとすれば、明としては冊封制度のたてまえの上から、右に述べたようにして既成事実を追認し、琉球国中山王を改めて琉球国王に封ずるといような手続をとらなくてはならない。そうした事実がない以上、「三山統一」といような事実があったことを同時代史料から積極的に主張することはできない。

二 『海東諸国記』所収の「琉球国之図」と三山の位置

朝鮮成宗二年（成化七年・一四七二）に申叔舟の著した『海東諸国記』には「琉球国之図」が収められている。その原図は一四五〇年頃に琉球を訪れた日本人商人によって作られたものらしく、現存する琉球最古の地図である。⁽⁸⁾この地図には山北、中山、山南という名称は見えず、北方に「国頭城」、中央に「琉球国都」が城郭として示されている。まず「琉球国都」であるが、これが現在の首里城をさし、中山王の居処であったことはたしかである。

この首里の外港は泊港であったと考えることができる。泊港は安里川の川口で、首里側から見るとその対岸は那覇島である（浮島というが、便宜上こう書くことにする）。那覇島は「琉球国之図」にも明示され、「那波（皆浦）」と記されている。そしてそこには「国庫」、「九面里」とある。前者が貿易関係の施設で、後者が久米村、つまり中国人集落である。那覇島のある湾には「津口、江南、南蛮、日本の商船の（集う）所」と註記されている。

この図から中山王の都は国都首里城、泊港、那覇島と、そこにある貿易関係の施設と中国人集落とが一組にな

つてその核となっていたことがわかる。これを「国頭城」にあてはめてみると、国頭城とその近くに描かれた「雲見泊」を結びつけて考えることができる。この雲見泊が今の運天港であることはたしかであるから、国頭城はその近くにあったことになる。今五万分の一の地図を見ると、運天港の南に「首里原」という地名がある。ここが国頭城の故地で、対岸の屋我地島に中国人集落があったのかもしれない。

私はこの国頭城が山北王の居処であつたと考えている。⁽⁹⁾それはいうまでもなく国頭城が運天港を支配する位置にあるからである。ここは日本方面にむかう航路の出発点である。このことと洪武十七年（一三八四）に中山、山南王には海舟の下賜があつたのに、山北王には下賜されなかつたことを考えると（一七八ページ参照）、当時運天港を起点とする貿易圏はせいぜい奄美大島くらいまでをカヴァーする局地的なもので、明への朝貢も那覇を経由して行っていたのかもしれない。

次に山南王の居処について考えてみると、「琉球国之図」には「島尾城」というのがある。東恩納寛惇はこれを「トミグスク」と読むことができるとしながらも、これを「島尻城」の誤りとし、島尻大里に比定しているが、⁽¹⁰⁾私はむしろこれを現在の豊見城をさすものと考えたい。その最大の理由は豊見城と那覇港、つまり国場川の川口との関係が首里城と泊港との関係に対応するからである。そうすると那覇島の中国人集落、つまり久米村は中山王、山南王の両方と関係を持っていたか、あるいは那覇島に二つの中国人集落があつたかのどちらかであろう。

このように考えると、三山の分立はこれら三箇所（もしくは二箇所）の中国人集落の人口の消長を示すものだと考えることもできる。つまり洪武十五年前後に多数の中国人が移住して来て、三箇所（もしくは二箇所）の中国人

集落が形成されたが、死亡、高齢化による帰国などで時とともに漸次人口が減少し、まず山北の中国人集落が姿を消し、やがて山南王の名前による朝貢も不必要になって行ったのではなからうか。

次に中山王、山南王をふくめた中山王国の内部構造を考えてみよう。これまでに述べてきたことから、中山王国は首里を都とし、少くとも豊見城、勝連など要地には王族が配置されていたことはたしかである。このほか『明実録』には「寨官」と呼ばれる人々が現れ、その子弟が官生として中国に派遣されている場合がある（たとえば「太祖実録」洪武二十五年五月癸未の条など）。この寨官が中国人であったと考えられる例もあり（「太祖実録」洪武二十五年五月庚寅の条）、また『明実録』に見える人名で「……結致」、「……結制」というものがあるが、この結致、結制などは「掟」の音を写したもので、後世の代官の意味であるから、中山王国全体は王の直轄地をもふくめていくつかの王子の所領にわかれ、その下に「寨」があつて、そこに「寨官」が任命されていたと考えることができる。ただここで興味あるのは、この「琉球国之図」にはいくつかの城の名前が記されているが、それには大きくわけ「某城」とあるものと、「某具足城」とあるものがあることである。しかもその分布を見ると、後者はほぼ沖縄本島東海岸の金武湾、中城湾に面した地域に集中している。そしてその中で「五欲（越来）城」と「賀通連（勝連）城」だけが「具足」がついていないという点で西海岸の城名と共通している。この「具足」が「グシク」の対音であり、それがついた城のほうが単に「某城」とあるものよりは古いものであると考えられる。⁽¹²⁾ そうすると、この時期沖縄本島では国際貿易を背景として新しい勢力が西海岸に成立し、それが東海岸のより古くから開けた地域を次第に支配下に収めつつあったとは考えられないであろうか。換言すれば三山時代の沖縄本島における真の

意味での地域的対立は「三山」のそれよりも、西海岸と東海岸のそれだったのではなからうか。

もつとも中山王国が強大な統一国家であつたわけではない。中山王の交代のたびに王位をめぐる紛争が起つたし、各地に封ぜられた王子もたえず離反の機をねらつていたというわけであるから、中山王は明の冊封をうけているということを權威のよりどころとし、対明関係の窓口の一つである泊港を直接支配し、「山南王子」を通じて那覇港を支配することによって、物質的な意味での優位性を保つていただけではなからうか。

以上で「三山統一」に関する同時代史料の検討を終り、次にこの時代が琉球の歴史記述の中でどのように扱われているかを検討してみたい。

三 琉球の歴史記述に見える三山関係記事

琉球の歴史記述としてはまず一六五〇年に向象賢が著したとされる『琉球国中山世鑑』（以下『世鑑』と略称する）がある。但し向象賢の筆に成るのはその中の序文、系図、および「琉球国中山王世継総論」という部分だけで、本文全五巻、もしくはその原形はおそくとも万暦七年（一五七九）以前には完成していたものと考えられる。⁽¹³⁾ ついで一六九七年から一七〇一年にかけて蔡鐸が『世鑑』を基礎とし、これを中国史料や『歴代宝案』と比較検討して『中山世譜』（以下蔡鐸本『世譜』と略称する）を著した。さらに蔡鐸の子蔡温が同書を基礎とし、中国史料その他に基いてこれを大幅に増補して一七二四年に現行の『中山世譜』（以下『世譜』と略称する）を著した。「三山統一」に関しては以上三種類の歴史記述が重要であるので、ここではそれらの三山関係の記述を検討し、琉球内部

で「三山統一」に関してどんな伝承があったかを明らかにしてみたい。⁽¹⁵⁾便宜上まず『世鑑』の記事の要約を掲げ、ついで他の史料と対比して行くとにする。

一、玉城王は元の元貞元年（一二九六）に生れ、十九歳の時王位についた。このころから王の權威は地におち、中山王、山南王、山北王が分立した。

二、山南王は大里按司で、佐舖、知念、玉城、具志上、東風平、鳴尻、大里、喜屋武、摩文仁、真壁、兼城、豊見城の十一国を従えていた。山北王というのは今帰仁按司で、羽地、名護、国頭、金武、伊江、伊平也を従えていた。中山は首里の王城をさす。中山王に服従していたのは那覇、泊、浦添、北溪、中城、越来、読谷山、具志川、勝連、首里三平等の諸国であった。三山はたがいに抗争していた。中山王玉城は至元二年（一三三六）に歿し、世子西威王が立って中山王となった。

一は『明実録』以前の時期で、中国側の史料と対比することはできないが、事実を伝えたものでないことはたしかである。また二では山南はほぼ西海岸の豊見城と東海岸の大里を結んだ線より南、山北は金武以北と伊江島、伊手屋島をさし、中山はその中間の地域をさしている。

この部分についての蔡鐸本『世譜』、『世譜』の記事の内容は『世鑑』のそれと同じである。

三、西威王は十歳で即位し、母后が攝政となったが、人々は浦添按司察度に帰服した。西威王は至正九年（一三四九）に在位十四年、二十三歳で歿した。国人は世子を廢し、察度を立てて中山王とした。

四、察度は浦添間切謝那村、奥間大親の息子で、母は天女であった。彼は勝連按司の娘と結婚し、のち人々

に推されて浦添按司となった。中山王西威が歿すると、人々は彼を立てて中山王とした。

三はいわゆる舜天王統と察度王統の交代を述べている。これも中国史料と対比することはできない。四は察度の出自を神秘化して記述している（要約には神話的部分は省略してある）。おそらく彼を主人公とした建国説話がまず作られ、その後で舜天王を主人公とする建国説話と琉球の国土創造説話が作られてその前に附加され、察度は王統の始祖とされたものであらう。蔡鐸本『世譜』、『世譜』ともこの部分では異同がない。

五、洪武二年（一二六九）大明皇帝は使節を派遣して即位の詔を伝達した。同五年（一二七二）中山王察度、山南王承察度、山北王帕尼芝はそろって明に使節を派遣した。これが進貢のはじまりである。これに対して洪武十六年（一二八三）には三山に鍍金銀印及び文綺等が下賜された。洪武二十二年（一二八九）中山王察度は明に官生を派遣した。同二十五年（一二九二）大明皇帝は閩人三十六姓を下賜した。久米村の人々はその子孫である。

1、洪武二年の招諭——明の琉球に対する招諭と使節の派遣は洪武五年（一二七二）のことである（『太祖実録』洪武五年正月甲子の条）。おそらく明の建国後直ちに琉球への使節の派遣があったという伝承があり、これが洪武二年のことと解釈されたのであらう。

2、洪武五年の三山の同時朝貢——三山の同時朝貢はたとえば洪武十七年（一二八四）にその事実がある（『太祖実録』洪武十七年正月己亥朔の条）。あるいは洪武五年の明からの使節の来琉と中山王察度の朝貢の事実が琉球側に伝承されており、三山の同時朝貢がそれに結びつけられたのかもしれない。

3、洪武十六年の鍍金銀印の下賜——この記述の典拠となったのは陳侃の『使琉球録』に引かれた『大明会典』の記事の「洪武十六年国王に鍍金銀印並びに文綺等の物を賜う。山南王も亦之の如し」とある部分である⁽¹⁶⁾。『世鑑』巻五に『使琉球録』が引用されているので、同書の著者がそれを読んだことはたしかである。

4、洪武二十二年の官生派遣——同じく陳侃使録の彼の按語に「子侄をして太学に入らしむるに至りては僅かに洪武二十二年にして創めて之を見る」とあるのと一致する⁽¹⁷⁾。『世鑑』の原文は「中山王察度、子弟を派遣して国学に入り、書を読み札を習わしむ。是れ球人入唐の始めなり」とある。

5、洪武二十五年の閩人三十六姓の下賜——陳侃使録には「我が太祖の天下を有するや……故に特に賜うに閩人の善く舟を操る者三十有六姓を以ってし、之をして往来に便ならしめ、時に朝貢せしむ」とある⁽¹⁸⁾。これは彼が嘉靖十二年（一五三三）に琉球を訪れた際に、現地で得た情報であると考えられる。

以上察度に関する『世鑑』の記述はみな対明関係に関するものであり、しかも3、4、5は陳侃の『使琉球録』と同一または類似の内容を持っていることがわかる。両者の前後関係をきめることはむずかしいが、私はこれらはみな久米村の起源説話、ないしは久米村に伝えられた伝承で、陳侃はその一部を自分の著述に記録し、『世鑑』の著者はそれに基いてこの記述を書いたのではないかと考えている。

蔡鐸本『世譜』には1、2、3については同じ記事があり、3についてはまた「洪武十六年癸亥、皇帝勅して金印章服を賜い、並びに流求を改めて琉球の名を賜う」という記事が附加され、4の次に洪武二十三年（一三九〇）に宮古、八重山がはじめて入貢したとする起源説話が附加されている。

『世譜』では蔡鐸本『世譜』の洪武十六年に琉球の名称が下賜されたという記事が洪武五年（一三七二）の項に採用されたほかは中国史料の記事が全面的に採用され、三山の朝貢も年代を追って記述されている。『世鑑』の1、2、3の記事は姿を消し、4はそれに対応する記事が中国史料にないので、「王子弟を遣して監に入り、書を読ましめんと欲するも果さず」と改められている。蔡鐸本『世譜』の宮古、八重山来貢の記事、および『世鑑』の5の記事はそのまま採用されている。

六、察度王は洪武二十八年（一三九五）、在位四十六年、七十五歳で歿し、世子武寧が王位についたが、暗愚であつたので、諸侯は多く離反した。そして山南王が義兵をあげたので、彼は永楽十九年（一四二二）、在位二十六年で降参した。諸侯は山南王を尊んで中山王と称した。

七、尚巴志は佐舗按司思紹の嫡子で、洪武五年（一三七二）に生れ、同三十五年（建文四年、一四〇二）に父思紹をついで佐舗按司となった。彼は五尺にもたりない小男であつたので、人々は彼を佐舗小按司と呼んだ。当時山南王は暗愚であつたので、人々は皆佐舗按司に帰服した。山南王は彼を攻めたが、諸侯は彼を推して山南王を攻落し、彼を山南王とした。

八、中山、山北の二山も大半は山南王に帰服したので、彼ははじめて兵を發して浦添を攻め、武寧を攻落して中山王となった。

1、察度の歿年——『明実録』では永楽二年（一四〇四）以前のことである（一八二ページ参照）。

2、思紹と尚巴志——尚巴思が思紹の嫡子であるという『世鑑』の記述は史実と一致している。また『世鑑』

には「父思紹に嗣テ、佐輔按司トゾ成給」とある。これは父思紹の歿後（これは明記されていない）尚巴志がそのあとをついで佐輔小按司となった（もしくは呼ばれた）という意味であろう。そうでなければ思紹が中山王に「追封」されたというあとの記述（十）が生きてこない。しかし「佐輔按司」と「佐輔小按司」という一対の名前は両者が同時に活動したという内容の説話のあったことを暗示している。これについては後に述べる。

3、山南王の交代——この部分の『世鑑』の記述は『明実録』の他魯毎の記事（一八一ページ参照）とよく似ている。おそらく「佐輔按司」という名前であったかどうかはわからないが、諸侯をひきいて山南王を倒し、自ら山南王となった」という、他魯毎の史実に基いた説話があったものと思われる。

4、山南王尚巴志と武寧——武寧の次に中山王となったのか思紹であることはたしかな事実であって、『世鑑』の記述は史実とは異っている。そこで武寧と思紹の関係を『明実録』で調べてみると、察度と武寧、思紹と尚巴志はそれぞれ平行して明に使者を派遣しているが、武寧と思紹との間にはそのようなことはない。思紹は武寧の「世子」と称しているが（『太宗実録』永樂五年四月乙未の条）、これは冊封を受ける場合の一つの形式である。従ってここで王統が交代したという可能性は否定できない。

『世鑑』の記事の原型では「佐輔按司」と「佐輔小按司」が一對となっていたらしいことは前に述べた。おそらく思紹が武寧を倒したという内容の説話がまず作られ、それが次に思紹と尚巴志が共同で武寧を倒したという内容に変化し（「佐輔按司」、「佐輔小按司」という名前はこの段階で作られたものであろう）、ついで『世鑑』の記述のようにそれが尚巴志一人の事蹟とされ、思紹は彼が「佐輔按司」となる前に歿した——とされて姿を消したので

はないかと思われる。そして「佐舖小按司」という名前の由来を説明するために、彼の背が低かったという説明が作り出され、また史実との矛盾を解決するために思紹が中山王に「追封」されたという記事が作り出されたのではなからうか。

では思紹、もしくは尚巴志が中山王となる前に山南王をほろぼして自ら山南王になったという『世鑑』の記述は史実を伝えているであろうか。『明実録』によると思紹が武寧にかわって中山王となるのは永樂四年（一四〇六）もしくはその前であるが、そうすると山南王の「滅亡」はその前でなくてはならない。当時の山南王は汪応祖であるから、『世鑑』に従うと山南王汪應祖が中山王思紹となるわけで、両者は同一人物でなくてはならないが、これは『明実録』の記事に関する限り不可能というほかはない。⁽¹⁹⁾要するにこれは『世鑑』の記事に無理があるのであって、私は山南王交代の説話と思紹による武寧追放の説話は元来別のものであったのが、山南王が姿を消したという史実を説明するために英雄尚巴志を介して一つに結びつけられ、『世鑑』のような形になったものと考えている。

蔡鐸本『世譜』は察度の歿年を『世鑑』と同じく洪武二十八年（一三九五）とし、また武寧が山南王に倒されたのを永樂三年（一四〇五）のこととしている。ついで思紹について「思紹は原是れ佐敷按司たり。時に〔三山の〕土を分け雄を争い、民塗炭を極むるに遇う。其の子巴志を觀るに乱を治むるの能有り。洪武三十五年佐敷を以て之に伝う。後巴志果して湯武の師を興し、民を水火の中に救う。征するに山南よりし、中山を得るに及びて其の父思紹を奉じて主と爲し、敢えて自立せず」とあり、大筋は『世鑑』と変らないが、『世鑑』では思紹は死んだとき

れているらしいのに対して、本書では尚巴志が思紹を助けて山南、中山を征服したと述べられている。これが別の伝承ないしは典拠を採用したものでないことは、彼の意見として、「旧譜を按ずるに、巴志既に洪武三十五年に父思紹の後を継ぎて佐敷按司となり、山南、中山を得るに及びて自ら立ちて王者たりと。蓋し誤りならん。若し此の如くんば、則ち思紹何を以てか受封の事有らんや。是に之を推すに、其の誤りを爲すは明らかなり。故に之を改めて今の如くす」とあることで明らかである。また蔡鐸は思紹の「追封」に関して「〔永樂〕五年丁亥九月皇帝封じて中山王と爲す。詔使並びに所錫の物件皆伝わらず」と述べ、それに意見を附して、宣徳二年（一四二七）に尚巴志に皮弁冠服が下賜された際の礼部咨の内容に基いて、永樂五年に中山王世子思紹に対して賜爵および皮弁冠服等の下賜があつたことを明らかにし、「追封」を明確に否定している。彼が武寧の降伏を永樂三年（一四〇五）のこととしたのは、この礼部咨の内容に基いて時期を合わせたからに違いない。

蔡鐸は尚巴志の出自に関する記述の中で、『世鑑』の記述のほかに鉄劍の魔力をテーマとした神話を附加して、神秘化をはかっている。そしてこの神話が彼の山南王攻撃の動機を説明するのにも用いられている。山南王攻撃に関する彼の記述は『世鑑』の記事に従い、「佐敷小按司」である尚巴志を主人公とし、「遂に武寧を伐つて中山を得、父思紹を王と爲す」と結んでいる。

『世譜』は佐敷按司巴志が（山南を倒す前に）武寧を倒して、父思紹を中山王に立てたと述べている。山南王に關しては永樂十三年（一四一五）の条に「A是れより先山南王承察度嗣無し、終に臨み従弟汪応祖に遺命して以て国事を攝らしむ。永樂二年汪応祖封を朝に受く。其の兄達勃期、B心甚だ之を痴とし、永樂十二年、C謀りて応

祖を弑し、位を篡う。各寨官、D並びに諸按司、E兵を合して達勃期を誅し、F応祖の長子、G他魯毎を推して国事を攝らしむ」とある。このうちA、C、E、Gはたしかに『明実録』にそれに対応する記事があるが(一八二ページ参照)、B、D、Fは『世譜』独自の記述である。これらはなにか典拠があつての記事というよりは、蔡温の解釈ではないかと思われる⁽²¹⁾。

尚巴志に関する『世譜』の記述は生年、佐敷小按司という名前の由来については『世鑑』の記述を採用し、また彼の出自に附加された神話、思紹が彼に佐敷を譲ったことについては蔡鐸本『世譜』の記述をそのまま採用している。ところがおかしいことには、その次に「山南王」でない「大里按司」を巴志が倒したという内容の記述があり、それ以外の点については『世譜』の記述は『世鑑』のそれと同じ筋なのである。つまり中国史料に基いて山南王の滅亡をずっとあとのほうに移したために、このような処置をして辻褄を合わせているわけで、独自の伝承に基いているわけではないと思われる。

九、山北王に服従していた諸国も次第に中山王に降参したので、山北王は怒って首里攻撃の準備をはじめた。中山王は羽地按司の通報でこれを知り、永樂二十年(一四二二)三月十一日首里を發して山北王を攻め、同十六日に山北王をほろぼし、琉球国を統一した。

この記述を『明実録』の記事でたしかめることはできない。蔡鐸本『世譜』の記事は『世鑑』のそれと同じである。『世譜』は山北王の滅亡を永樂十四年(一四一六)のこととし、「本年、山北王攀安知、中山王の滅す所となる」と述べたあとで『世鑑』の記事をほぼ採用し、思紹から派遣された尚巴志を主人公としている。これは永樂

十三年を最後として山北王が中国史料から姿を消すという事実に合わせて、とくに確実な根拠があつてのことではないと思われる。

十、永樂二十一年（一四二三）中山王尚巴志は明に使者を派遣して三山統一を上奏した。大明皇帝はこれを嘉して宣德三年（一四二八）内監柴山、副使阮某を派遣して勅語を下し、尚巴志を琉球国中山王に封じ、父思紹を追封して中山王尚思紹とし、皮弁冠服等の物を賜った。これが冠船の始りである。中山王が尚姓を称することもここに始つた。使節の帰国に際して尚巴志は三司官の一人を王舅と称し、勅船に随行させて入貢させた。これが王舅使のはじまりである。察度、武寧の時は進貢は三、四年に一度、または五、六年に一度であつたが、この時から二年一貢となつた。

1、永樂二十一年の三山統一の上奏——永樂二十一年に「世子尚巴志」が使者を派遣して入貢させたこと、そしてそれが重要な意味を持っていたらしいことは第一節で述べた。この点で『明実録』の記事と『世鑑』の記述が一致していることに注意したい。このことについて琉球側に古い伝承があつたことは確実とみられる。九で山北王の滅亡が永樂二十年のこととされているのは、この朝貢に合わせたものに違いない。またここには尚巴志の「上奏文」と「勅諭」が掲げられており、琉球側にも「三山統一」のためにはこうした文書が必要だという認識のあつたことがわかる。ところがその「上奏文」は「我琉球、国分爲レ三ヨリ以来、百有餘年ノ間、一日片時モ、合戦ノ止時無シ……」というようになつた多くの日本語である。大明皇帝の勅書も「……此比爾、義兵ヲ揚テ、太平ヲ致ス事、神妙ノ至リ也……」などという不思議な文章である。当時外交文書は久米村の閩人、もしくは官生

として明に留学した人々がはじめから漢文で書いた筈であるから、ここに見える「上奏文」と「勅語」は後世の創作であらう。⁽²²⁾

2、宣徳三年の内監柴山の来琉——この年柴山が琉球に派遣されたことは事実であるが（「宣宗実録」宣徳三年十二月庚寅の條。實際の到着は翌年であらう）、これは彼の二度目の来琉であつて、洪熙元年（一四二五）の彼の第一回の来琉の際の目的が尚巴志の冊封であつた（「仁宗実録」洪熙元年二月辛丑朔の條）。

3、思紹の「追封」——これについては既に述べたので、ここではくりかえさない。

4、冠船（冊封使の乗船）の来航——初見は武寧冊封の際で、永樂二年（一四〇四）のことである（「太宗実録」永樂二年二月壬辰の條）。これに対して同年武寧がその「舅」を派遣している（同書、永樂二年十月乙未の條）。『世鑑』はこれを尚巴志の事蹟として述べているように思われる。

5、尚姓のはじまり——尚姓をはじめて称したのが尚巴志であつたことはたしかである。

6、二年一貢のはじまり——これは陳侃使録に引く「大明会典」の記事に「永樂以来國王嗣立すれば皆冊封を命ぜられんことを請う。是れより惟だ中山王のみ来り、毎二年朝貢一次……」⁽²³⁾とあるのに基いていると思われる。

蔡鐸本『世鑑』ではまず「永樂二十年壬寅即位。此時始めて尚姓を賜う」とあつて、尚姓に対して『世鑑』以上の權威づけが行なわれている。ついで「吾朝王爵を請封するの例此より始まる」とだけあつて、永樂二十一年に尚巴志が三山統一の上奏をしたという『世鑑』の記事、その「上奏文」、「勅語」はみな省略されている。これは蔡鐸が中国史料を検討し、その事実なしとしてこれらを削除したのに違いない。内官柴山の琉球来航について

も洪熙元年に彼が冊封使として来航した事実を正しく記し、第二回の来琉についてもその際の勅語を引用している。王舅使についての言及はなく、蔡鐸はこれをも削除したものと思われる。進貢については彼は「三年二貢」と、自分の時代の慣行を記している。

『世譜』では永樂二十年（一四三三）の明への朝貢を「三山統一」とは結びつけていない。これは当然のことである。そして宣徳四年（一四二九）の条に「本年山南王他魯每中山の滅す所となる」とあり、さらに尚巴志が三山統一を上奏し、明からはそれに対して勅語が下賜されたとし、その上奏文と勅語が漢文で掲げられている。またこの年内官柴山が来航して勅語を伝達し、尚姓を賜ったと述べている。これらが史実に基いた記述でないことは明らかである。蔡温は蔡鐸の記述にあきたらず、『世鑑』にならってこれらを創作したものと考えられる。

十一、尚巴志は在位十八年、六十八歳で正統四年（一四三九）四月三十日に歿した。今帰仁王子が立つて中山王尚忠となった。

尚巴志の死は『歴代宝案』によると正統六年（一四四一）四月二十六日である。⁽²⁴⁾ 尚忠が今帰仁王子であったという記述にいわゆる「山北監守」任命の事実を見出そうとする意見もある。⁽²⁵⁾ 蔡鐸本『世譜』の記述は『世鑑』のそれと同じであるが、『世譜』にはたしかに永樂二十年（一四二二）のこととして「本年、第二子尚忠を遣して山北を監守せしむ。（中略）其れ山北の復た嶮岨を待みて変を生ぜんことを恐るるなり。遂に尚忠をして監守せしめ、以て変乱を拒^{ふせ}がしむ。因て之を称して今帰仁王子と曰う」とある。ただ現段階では山北王に関する事実を明らかにできないので、これについてはなんともいえない。

以上述べたところから、少なくとも「三山統一」に関して『世鑑』は「史実」ではなく、「説話」ないし「伝承」を記録しているに過ぎないこと、蔡鐸本『世譜』と『世譜』には独自の記述がないことがはっきりする。従って次に『世鑑』の記述と『明実録』など同時代史料の記述を対比し、「三山統一」説話がどのようにして形成されたかを考えてみよう。

四 「三山統一」説話の形成

同時代史料と『世鑑』の記事を比較対照すると、史実と伝承との関係についてはほ次のようなことがいえる。

A、明側で「三山」の対立としてとらえていた現象は、琉球側でいえば中山王と山南王子、つまり首里と豊見城の対立であった。山北王の居処は「国頭城」であったことはたしかであるが、史料が乏しく、また孤立して判断する手がかりがない。いずれにせよ中山から山南、山北が分立したという『世鑑』の記述（前掲の要約一）は史実とは関係がない。

B、三山の領域に関する『世鑑』の記述（二）は三山時代よりかなり後の状況を反映している可能性がある。

C、察度は明とはじめて交渉を持った中山王である。『世鑑』が彼を王統の始祖としているのは（三）、史実を伝えている可能性がある。察度の出自が神秘化されていること（四）から考えて、彼を主人公とした建国説話があったと考えられる。

D、察度王の事蹟に関する『世鑑』の記述（五）はおそらく久米村に伝えられた伝承に基くものと考えられ、彼

と久米村の創設との間に深い関係のあったことが知られる。その伝承は史実をかなりの程度反映しているものと考えられる。

E、察度ののち武寧が中山王となった際、国内に混乱のあった可能性があるが、『世鑑』にはそうした伝承のあったことを示すような記述はない。

F、武寧が「追放」され、尚巴志が中山王になったという『世鑑』の記述(六)は同時代史料から見ても、その可能性は否定できない。ただしその場合実際に武寧を「追放」したのは思紹であった筈である。

G、尚巴志が思紹の嫡子であったという点は史実と『世鑑』の記述が一致している。

H、山南王の交代に関する『世鑑』の記述(七)は他魯毎の史実を反映しているらしい。ただその元来の形は尚巴志とは無関係なものであったと思われる。

I、山北、山南はいつのころから姿を消した。その事実を説明するために山南王交代の説話が尚巴志に結びつけられ(八)、山北王滅亡の説話が作られた。ただし山北王の滅亡に関する『世鑑』の記述(九)は目下のところ史実と対比することができない。

J、思紹の歿後中山王国内部で混乱があった可能性があるが、『世鑑』はこれについてふれていない。

K、永樂二十一年(一四三三)の朝貢は史実と『世鑑』の記述(以下十)が一致している第二の点である。

L、「三山統一」に関する「上奏文」と「詔勅」は明らかに後世の創作である。従って「上奏文」の捧呈と「勅語」の下賜がなかったという点において史実と『世鑑』の記述は一致しているということができる。これが第三

の一致点である。

M、内官柴山の来琉は史実と『世鑑』の記述が一致する第四の点である。

N、王舅使の派遣は武寧の事蹟であるが、『世鑑』の記述では尚巴志の事蹟とされている。

O、尚忠が今帰仁王子に任命されたという『世鑑』の記述については山北王の事蹟が今一つはつきりしないので、判断を留保したい。

以上述べたところから、史実と『世鑑』の記述が一致する点をつなぎ合わせてみると、次のようになる。すなわちはじめて明と交渉を持った中山王察度(C)の時代には三山が別々に明と交渉を持ち、冊封をうけていた(A、D)。中山王武寧のあとで王統の交代のあった可能性があり(F)、山南王の場合も類似の事件があった(H)。山南、山北の二山はいつのころから姿を消した(I)。思紹の嫡子尚巴志(G)は「三山統一」ではないなんらかの理由(L)で重大な意味を持つ使節を永樂二十一年に明に派遣して父思紹の訃を告げた(K)。明からは内官柴山が冊封使として琉球に派遣された(M)。

この「なんらかの理由」はおそらく中山王の相続争いに尚巴志が勝利を取めたことであつたと思われる(J)。それが山南、山北の二王が姿を消した事実を説明するために、この「なんらかの理由」が「三山統一」であると考えられ、さまざまな説話を尚巴志を主人公としてまとめ、現在見られるような英雄説話が作られたものと考えられる。その直接のきっかけとなつたのは、天順五年(一四六一)に編集された『大明一統志』巻八十九琉球国の条の「本朝洪武中其国分れて三となる。曰く中山王、曰く山南王、曰く山北王と。皆使を遣して朝貢す。永樂初其国

王嗣立して皆朝廷の冊封を受く。自後惟中山のみ来朝すること今に至るも絶えず。其の山南山北の二王は蓋し(中山の併せる所となるという)⁽²⁶⁾とある記事がなんらかの形で琉球に伝えられたからではないかと思われる。要するに「三山統一」に関する『世鑑』の記述は一箇の説話であつて、それは明から入手した右に述べたような情報を基本とし、それを琉球側の所伝を材料とし、尚巴志を主人公として作られた英雄説話であつたと思われるのである。⁽²⁷⁾

こうした尚巴志による三山統一の説話が作られた背後には尚真時代(一四七七ころ—一五二七)の中央集権化政策があつたと考えられる。彼はそのためにさまざまな土木工事を行つたらしいが、その一つとして嘉靖六年(一五三二)に首里と豊見城の間に道路をつくり、国場川に真玉橋をかけた。これについては「真珠湊碑文」があるが、その中に

「このはしはくにのあんじ、げすのため、又世の御さうぜのために、ねだてひかわ、又とよミぐすく、此ぐすくとミづのかくごのために、一ばんのさとぬしべ、あくかべ、はへばら、しまおそい大さと、ちへねん、さしきわま玉ばしおわたり、下しまじり、ともにかきのはなぢにせいぞろい、天三十三天、地は十八天あかめたてまつり候て、三百人そつたち、はしくやうの御ゆわい申候」

(この橋は国の按司、下司のため、また国王の思召しによつて清流と豊見城、つまりこの豊見城と水の確保のために作られた。一番の領主から無位の者まで、南風原、島添大里、知念から真玉橋を渡り、下島尻の人々とともに垣花地に勢揃いし、天は三十三天、地は十八天をあがめ、三百人の僧達が橋供養を行った)

(28) とある。ここに見える地名が『世鑑』のいう山南王の支配地域にふくまれており、またこの地域において豊見城が重要であったことが明らかになるとともに、地形と交通不便のために、この地域がとかく分立しがちであったらしいことがわかる。おそらく尚真時代までは琉球内部の状況は三山時代と大差なく、尚真時代になつてはじめて中央集権化がはかられたのであろう。尚巴志を主人公とする「三山統一」説話はそうした時代の要請にちやうど、尚真の側近の手によって作られたものではなからうか。

〔附記〕 この論文は昭和五十六年度に行なわれた東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センターの南島における稲作調査の報告書の一部である。

註

- (1) この時期の『明実録』の関係記事は和田久徳「明実録の沖縄史料(一)」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』二四—二、一九七一、一—六二ページ)にまとめられている。本論文執筆に際してはこれを利用した。
- (2) 生田滋「対外関係より見た琉球古代史」(渡部忠世、生田滋編『南島の稲作文化』(法政大学出版局、一九八四)九三—九五ページ)。
- (3) 小葉田淳『中世南島通交貿易史の研究』(日本評論社、一九三九、一六八—一八五ページ)。
- (4) 和田久徳「琉球国の三山統一」についての「新考察」(南島史学会編『南島——その歴史と文化』国書刊行会、一九七六)一二二—一二七ページ。
- (5) 和田氏は他魯毎を尚巴志の第一王子に比定している(和田、一九七六、一二〇—一二二ページ)。
- (6) 申叔舟『海東諸国記』(『朝鮮史料叢刊』第二、朝鮮総督府、一九三三)一〇七b—一〇八a。
- (7) ただしこれは彼の第三回目の使節の派遣である(『太宗実録』永樂十三年八月己丑、および同十五年九月丙寅の条)。
- (8) 東恩納寛惇「黎明期の海外交通史」(琉球新報社編『東

恩納寛惇全集」三、一九七九）六二—六三ページ。

(9) 通説ではのちに述べる『琉球国中山世鑑』の記述に従って、今帰仁を山北王の居処としている（東恩納「黎明期」五六ページ）。

(10) 東恩納「黎明期」五九ページ。なお通説では山南王の居処は大里である。ただし豊見城とする説も古くからあり、私の新しい見解ではない（東恩納寛惇「南島風土記」〔全集〕七、一九八〇）四六六—四六七、五一三ページ）。

(11) 東恩納「南島風土記」一一三ページ。人名にふくまれる地名から支配領域等を考えるという方法がある。但し同じ地名が島内各処に見られる例があるなど、それに着手する前に解決すべき問題が多く、この論文ではあえて試みなかった。

(12) 東恩納寛惇は「某城」は城名のグシク、「某具、足城」は地名のグシクを写したと判断している（東恩納「黎明期」五九ページ）。地名となっているもののほうがより古いと判断してよいであろう。

(13) この年冊封使として琉球を訪れた蕭崇業、謝杰の『使琉球録』の「使事紀」に「宣徳二年、欽差内監柴山勅封国王尚巴志（請封自巴志始、父思紹係追封）」とあり、以下冊封使のリストは『世鑑』の記述と一致し、これが琉

球側の史料に基いたものであることがわかる（蕭崇業、謝杰『使琉球録、附皇華唱和詩』（台北、台湾学生書局、一九六九）四八—四九ページ）。この論文執筆の際、郭汝霖の使録を見ることができなかったが、同書の記述によってさらに年代を限定できる可能性がある。

(14) 前の註で述べた郭汝霖の使録のほかにいくつかの使録を見ることができなかったため、一応「中国史料」という漠然とした表現にしておきたい。

(15) 「琉球国中山世鑑」〔『琉球史料叢書』五、名取書店、一九四一所収〕二八—四二ページ。『蔡鐸本中山世譜』（沖縄県教育委員会、一九七三）二二—二七、一六五—一八〇ページ。ページ付が混乱しているが、これは原本通りである。『中山世譜』〔『琉球史料叢書』四、名取書店、一九四一〕三六—六三ページ。以下引用箇所の指示は省略する。

(16) 陳侃『使琉球録』（『使琉球録三種』（台湾文献叢刊二八七）台湾銀行經濟研究室、一九六一、二冊）三三ページ。

(17) 陳侃、二八ページ。

(18) 陳侃、二四ページ。

(19) 思紹の朝貢の初見は「太宗実録」永樂五年四月乙未の条であり、汪応祖の朝貢に関する最後の記事は永樂十

一年八月癸亥の条にある。

- (20) 『歴代宝案』(台北、国立台湾大学、一九七二)一、
一二九—一三〇ページ。

(21) 蔡温の参照した漢文史料にすでにそのように記述されていたのかもしれない。必要な史料を点検できなかったのは遺憾である。

(22) 和田氏はこれを「統一の奏が準備されたとしても実際に使用されなかったことは確かであろう」と述べている(和田、一九七六、一三〇ページ)。

- (23) 陳侃、三三ページ。

- (24) 『歴代宝案』一、四〇七ページ。

- (25) 和田、一九七六、一一六—一一八ページ。

- (26) 『大明一統志』(台北、統一出版印刷公司、一九六五)

十、五四九三ページ。和田氏はこれを推測に基く記述と判断している(和田、一九七六、一〇六ページ)。私も同意見である。

(27) 和田氏はその論文(和田、一九七六)で『世鑑』以下の歴史記述を事実を伝えようとしたものと見做し、相互の比較からそれらの「誤り」を指摘している。私は『世鑑』以下の記述は伝承を記録したものであると見做し、伝承の変化、ないしは改修の過程を追跡し、同時代史料の分析とは厳密に区別した。このため結果的には同氏の結論とは異なる結論に達したわけである。

- (28) 原文および釈文は東恩納「南島風土記」四七二—四七三ページによった。